

「WILD359ers」の活動を事例とした、子どもへのスポーツサービスの提案  
Suggestions of sports service for children  
-Case study of “WILD359ers” activity-

1K09A135

指導教員 主査 中村好男 先生

瀬戸 純哉

副査 間野義之 先生

【目的】

文部科学省が昭和 39（1961）年から全国で収集している「スポーツテスト」及び「新体力テスト」のデータや、中央教育審議会が平成 14 年 9 月に文部科学大臣へ答申した「子どもの体力向上のための総合的方策」から、近年の日本社会において子どもの体力低下が問題とされている。

本研究では運動が不得意、きらいと感じる子どもを減らし、子どもの体力低下にアプローチしていく手段として、早稲田大学所沢キャンパスの学生が主体となって運営する「WILD359ers」（ワイルド スリー・フィフティ・ナイナーズ）というスポーツ団体が、参加者である子どもをどのように増加させ、ニーズを満たしていったのかをマーケティングの観点から明らかにしていく。マーケティング・ミックスの 4P のうち特に「製品（product）」に着目し、それを提供する学生スタッフの取り組みに焦点をあてることで、何が参加者増加に効果的な要因だったのかを明らかにすることを目的とする。それによって運動が不得意、きらいと感じている子どもへのスポーツサービスの成功要素が抽出できると著者は考えた。

【方法】

WILD359ers の提供する製品のうち、通常活動である「fun・土」、「Flags」、「スポチャン・クラブ」、「fan fun factory」の 4 種目それぞれの指導者及び運営経験のある学生スタッフ 4 名を対象に、Ⅰ．活動を指導するにあたっての経緯 Ⅱ．指導するスポーツ、活動の特性について Ⅲ．製品価値を高めるため、及び競合との差別化を図るための取り組み Ⅳ．子どもたちの変化に関わること の 4 つをテーマに半構造化インタビューを行った。インタビュー実施後、スマートフォンの録音データを元とした逐語録を作成し、記述データとした。記述データの中から意味のある項目、文脈を重要アイテムとして抽出した。抽出された記述をコード化して内容を検討し、意味内容の同質性、異質性を検討し、共通するものをカテゴリー化することによって抽象化する作業を行った。

【結果】

それぞれのテーマ毎にコード化された内容をカテゴリー化することによって、Ⅰ．活動を指導するにあたっての経緯 では(1)自己経験 (2) 活動を通して伝えたいこと (3) 受け皿の創設 (4) 指導者としてのキャリア の 4 つに分類された。Ⅱ．指導するスポーツ、活動の特性について では(1)関係性の特性 (2) 指導者の特性 (3) 運営上の特性 (4) スポーツの特性 の 4 つに分類された。Ⅲ．製品価値を高めるため、及び競合との差別化を図るための取り組み では(1)コンセプト (2)個別のフォロー (3)ニーズ の 3 つに分類された。Ⅳ．子どもたちの変化に関わることでは種目ごとに分類された結果が得られた。

【考察・結論】

学生スタッフ 4 名から記述データに基づき考察を行った結果、次の 4 点が分かった。まず、運動が苦手な子どもの受け皿として WILD359ers が確立されていること。次に、学生スタッフが子どもたちの成長に関心をもっていること。3 つ目に、指導、運営するスポーツそして活動の場を通して、子どもたちに学んで欲しいことが明確にあること。最後に、多様な立場の人間が子どものスポーツサービスの現場に関わるのが他のスポーツサービスと一線を画すということ。

以上、本研究より子どもに向けたスポーツサービスにおいて

- ①運動が苦手な子どもや運動する機会、場所がないという子どもたちのニーズを把握した上で受け皿を作ること
- ②子ども一人一人の変化、成長に対して提供者側が関心をもちフォローを行っていくこと
- ③スポーツや活動の場を通して、参加者である子どもたちに伝えたいこと、学んで欲しいことが明確にあること
- ④「教える側と教えられる側」という一方通行な関係性で終わらせないサービスであること

上記 4 点に取り組むことが、運動習慣が少なく、運動が不得意、きらいと感じている子どもを減らしていくことにつながり、現在の日本社会の問題を解決できるのではないかと著者は結論づけた。